令和8年度 ふくしま学力調査 報告書

令和８年１１月２７日
福 島 県 教 育 委 員 会

１ ふくしま学力調査について

１　調査の目的

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

２　調査実施日

令和８年５月１８日（月）～６月５日（金）の１５日間
※　各学校において期間の中から学年ごとに１日を選択し、実施。

３　参加学校数・参加人数

（１）小学校　３８０校
※　義務教育学校前期課程及び県立特別支援学校小学部を含む。以下同じ。
（２）中学校　２０８校
※　義務教育学校後期課程及び県立特別支援学校中学部を含む。以下同じ。
（３）児童生徒数（人）（質問紙を含むいずれかの教科を１つ以上実施した児童生徒の人数）

小学校４年生	小学校５年生	小学校６年生	中学校１年生	中学校２年生
１２，６２８	１３，２１３	１３，４５７	１３，３０６	１１，９８４

４　調査事項

（１）調査方法
○　１人１台端末を使用したＣＢＴ（※今年度調査より実施）
（２）教科に関する調査
○　小学校第４学年～第６学年　国語、算数
○　中学校第１学年・第２学年　国語、数学
（３）質問調査
○　学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項

５　結果の活用について

（１）児童生徒の学習改善への活用
各学校は、個人結果票をもとに児童生徒に学習改善に向けたアドバイスを行う。また、個人結果票を家庭学習の充実に向けて保護者と連携するための資料とする。
（２）各学校の授業改善への活用
各学校は、県教育委員会が提供する「校内研修活用資料」や「グラフ化ツール」、各校一斉参加型オンライン分析研修会（ハイブリッド型分析研修会）の機会等を活用して、返却された結果から児童生徒の学力のレベルや学力の伸びの状況等を分析する。その上で、学力向上プラン等を見直し、２学期以降の授業改善につなげていく。
なお、結果分析に当たっては、管理職や学級担任、教科担任等が単独で行うのではなく、結果帳票を基に、複数の教職員の視点で日頃の見取りと結果データを往還させながら、多面的に行うことを推奨する。
（３）好事例の横展開
各学校は、学力を伸ばした可能性のある教員の取組の共有や、県教育委員会が作成する「学力の伸びを引き出した学校の取組事例集」の活用をとおして、自校の実態に応じた学力向上の取組の改善・充実を図る。

6　「学力のレベル」と「学力の伸び」について

各学年ごとのレベルの範囲　（白が当該学年のレベルの範囲です）

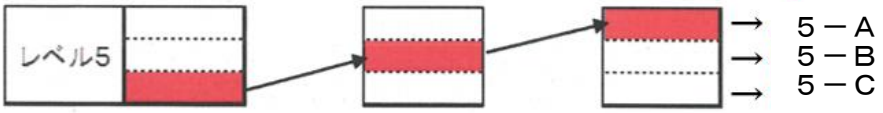
	小4	小5	小6	中1	中2	中3
レベル12						
レベル11						
レベル10						
レベル9						
レベル8						
レベル7						
レベル6						
レベル5						
レベル4						
レベル3						
レベル2						
レベル1						

レベル	レベル（3分割）	数値
レベル12	12−A	36
	12−B	35
	12−C	34
レベル11	11−A	33
	11−B	32
	11−C	31
レベル10	10−A	30
	10−B	29
	10−C	28
レベル9	9−A	27
	9−B	26
	9−C	25
レベル8	8−A	24
	8−B	23
	8−C	22
レベル7	7−A	21
	7−B	20
	7−C	19
レベル6	6−A	18
	6−B	17
	6−C	16
レベル5	5−A	15
	5−B	14
	5−C	13
レベル4	4−A	12
	4−B	11
	4−C	10
レベル3	3−A	9
	3−B	8
	3−C	7
レベル2	2−A	6
	2−B	5
	2−C	4
レベル1	1−A	3
	1−B	2
	1−C	1

（1）学力のレベル

全ての問題に難易度を設定し、「どのくらい難しい問題を解く力があるか」を「学力のレベル」で表す。「学力のレベル」はレベル１からレベル１２まであるが、測定は各学年７つのレベルで行う。なお、福島県では中学３年生は実施しないため、「学力のレベル」はレベル１１までである。

さらに、１つの「学力のレベル」は３分割され、「学力の伸び」が詳細に分かる。例えば、同じレベル５でも、「学力のレベル」が高くなるとバーの位置が上がる。



（2）学力の伸び

集計対象となる児童生徒の「学力のレベル（３分割)」を数値化し、前回調査との差を計算する（例：１－Ｃは“１”、１１－Ａは“３３”）。

（3）「学力が伸びた児童生徒」の定義

「学力のレベル（３分割)」を数値化した数値が、前年度から１以上増加した児童生徒を「学力が伸びた児童生徒」と捉える。